### <オリエンテーション>

# A. テーマ:「新約聖書からキリスト教古代へ」

### B. 目的

この特殊講義は、すでに系共通科目「キリスト教学講義A・B」を受講し、キリスト教 思想研究に関心のある学部生、あるいはキリスト教研究の基礎の習得をめざす大学院生を 対象に行われる。キリスト教思想研究を目指す際に身につけておくべき事柄について、ま たいかなるテーマをどのように取り上げるのかについて、解説を行う。

#### C. 到達目標

- ・キリスト教学をテーマとした研究(卒論・修論)を行うために必要な方法や知識を身に つけることができる。
- ・キリスト教研究に関する広い知見をもとに、自主的な研究に取り組む能力を養う。
- ・キリスト教学をテーマとした研究を発表するための訓練を受けることができる。

### D. 確認事項

受講生には、常識や先入観を批判的に問い直す態度と積極的な授業参加(参考文献による復習を含め)を期待したい。質問は、オフィスアワー(火3・木3)を利用するか、メール(Sadamichi.Ashina@gmail.com)で行うこと。

## E. 授業スケジュール

初回のオリエンテーションに続いて、次のような項目について、講義が進められる。一回の 講義で一つの項目が取り上げられる。

0.	オリエンテーション	4/12
1.	新約聖書と新約聖書学	4/19
2.	イエスと「神の国」運動	4/26
3.	病の癒やし・譬え・共同生活	5/10
4.	イエスの宗教運動から初期キリスト教へ	5/17
5.	初期キリスト教の多様性とパウロ	5/24
6.	パウロの異邦人伝道	5/31
7.	パウロ以降のキリスト教	6/7
8.	ユダヤ教とローマ帝国	6/14
9.	古代キリスト教1:ヘレニズム・ローマ世界、使徒教父	6/21
10.	古代キリスト教2:キリスト教迫害と弁証家たち	6/28
11.	古代キリスト教3:アレキサンドリア学派とオリゲネス	7/5
12.	古代キリスト教4:公認・国教会と正統教会	7/12
13.	古代キリスト教5:アウグスティヌス	7/19
14.	古代キリスト教6:ゲルマン民族移動から中世へ	(7/26)
15.	フィードバック	

# <導入>

A. 「キリスト教思想史研究」に向けて(「キリスト教学講義」より)

- 1. 宗教現象を見る二つの視点
  - 1)外から、客観的データの分析に基づいて → 現代宗教学 宗教現象にアプローチするにはまず第一に考えられるべき方法論的態度ではあるが、対象を「深く」理解するには限界がある。
  - 2) 内から、内から発信され表現されたものを手掛かりに内面へと迫る 個人であろうと集団であろうと、その内面にまで迫る仕方で理解するには、 対象自身が意識的あるいは無意識的に外部へ発信してくる自己表現に注目。
- 2. 思想とは何か? なぜ思想なのか!

生き方を決めているポリシーの問題(思考方法、発想法、見方)としての思想。 思想は暗記科目ではない。

- 3. 思想は、個人の発明である前に共同体の共有の思考方法である。
  - → キリスト教思想は聖書から始まる。
- 4. 思想の歴史性 → 思想史的アプローチの必要性

(芦名定道『近代日本とキリスト教思想の可能性――二つの地平の交わるところから』 三恵社、2016年。)

# B. 書評:

5. ハンス・キュンク著 (片山寛訳)『キリスト教思想の形成者たち――パウロからカール・バルト』新教出版社、2014年。

序――神学への小さな入門書

パウロ――キリスト教の世界宗教への夜明け オリゲネス――古代とキリスト教精神の偉大な統合 アウグスティヌス――ラテン的・西洋的神学の父 トマス・アクィナス――大学の学問と教皇の宮廷神学 マルティン・ルター――パラダイム転換の古典的事例としての福音への回帰 フリードリヒ・シュライエルマッハー――近代の薄明の中の神学 カール・バルト――ポストモダンへの移行における神学

エピローグ――時代にかなった神学への指針 訳者あとがき

#### 6. 書評

ハンス・キュンク (一九二八年一) は、二十世紀後半を代表するカトリック神学者の一人であり、現在に至るまで、神学界から世界へと積極的な発言・発信を続けているキリスト教思想家です。スイスに生まれ、カール・バルトの義認論で博士学位を取得、第二バチカン公会議で活躍しましたが、その後教会論や教皇無謬論をめぐる教皇庁との軋轢によってカトリック神学部から追放される中、エキュメニズムを推進し宗教間対話や世界倫理を提唱するなどの活躍を続けています。まさに、キュンクの発言には現代キリスト教の証言者としての重みが感じられます。

このたび、キュンク著『キリスト教思想の形成者たち』が、優れた邦訳によって出版さ

れました。これは、キリスト教思想史を通した神学入門(「神学への小さな入門書」)と言うべき書物であり、これによってキュンクは、体系的思想の巨匠が一流の思想史家でもあることを――バルトやティリッヒがそうであったように――、実演した言うことができるでしょう。取り上げられる思想家は、パウロ、オリゲネス、アウグスティヌス、トマス・アクィナス、ルター、シュライエルマッハー、バルトという選び抜かれた七人ですが、読

者は、キュンクの目を通して、キリスト教思想史の豊かな展開に触れることができます。

もちろん、これら七人はキュンクの個人的な好みだけで選ばれたわけではありません。本書が描くキリスト教思想史のキーワードは、パラダイム(思想史の一つの時代を前後から区別しその時代を特徴付け、時代の思想家たちに共有された思考様式・問題系)ですが、キュンクは、キリスト教史をパラダイムの交代・転換のプロセスとして叙述しています。それは、キリスト教思想を時代状況との相関において捉える試みであり、そのパラダイムを生み出し体現した思想家が、先に挙げた七人だったのです。つまり、パウロは新約聖書的キリスト教的パラダイムに、オリゲネスは古代キリスト教的パラダイムに、アウグスティヌスは西方キリスト教的パラダイムに、トマス・アクィナスは中世的スコラ的パラダイムに、ルターは宗教改革的パラダイムに、シュライエルマッハーは近代キリスト教的パラダイムに、ルターは宗教改革的パラダイムに、シュライエルマッハーは近代キリスト教的パラダイムに、そしてバルトはポスト近代的パラダイムに対応する人物として描かれています。それぞれの思想家についての叙述は明解かつ洞察に満ちており、そして何よりも思想家の評価が公平であることが本書の魅力です。たとえば、「ルターの正しかった点」と「ルターの宗教改革の問題をはらんだ帰結」(222~228頁)をご覧ください。

さらに、本書の優れた特質として、それぞれの思想家を年表や注を交えて説得的に紹介する――この点で本書は行き届いた入門書です――だけでなく、そこに現代的視点を反映させていることが挙げられます。たとえば、キュンクはアウグスティヌスやトマス・アクィナスを論じる際に、両者の女性理解を批判的に検討しています(133~135、176~181頁)。またバルトを論じる中で、ボンヘッファー、ティリッヒ、ブルンナー、ブルトマンらに触れることによってバルトを相対化することを、キュンクは忘れていません(特に、「なお残る挑戦――「自然神学」」の箇所において)。

現代のキリスト教思想は多様な動向、多岐にわたる問題が入り乱れ、いわば渾沌とした状況にあります。キリスト教会自体を取り巻く現実もきわめて複雑です。本書のエピローグで、キュンクは「時代にかなった神学プログラム」を提示することによって、現代のキリスト教神学の進むべき道を示そうとしています。日本のキリスト教が直面する複雑な問題状況は、まさに「時代にかなった神学への指針」を必要としています。こうした中で、本書に描き出されたキリスト教思想史のマクロな視点が、問題解決の重要な糸口となることは疑いありません。このキュンクの「神学への小さな入門書」は多くの読者の期待に応える必読の一冊となるでしょう。

#### C. 新約聖書から古代キリスト教へ

7. 初期キリスト教思想の中心テーマとしての「パウロの十字架・復活理解」「贖罪」「5:8 しかし、わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました。9 それで今や、わたしたちはキリストの血によって義とされたのですから、キリストによって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。」(ローマ)

「5:15 その一人の方はすべての人のために死んでくださった。その目的は、生きている 人たちが、もはや自分自身のために生きるのではなく、自分たちのために死んで復活して くださった方のために生きることなのです。16 それで、わたしたちは、今後だれをも肉に従って知ろうとはしません。肉に従ってキリストを知っていたとしても、今はもうそのように知ろうとはしません。17 だから、キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた。18 これらはすべて神から出ることであって、神は、キリストを通してわたしたちを御自分と和解させ、また、和解のために奉仕する任務をわたしたちにお授けになりました。19 つまり、神はキリストによって世を御自分と和解させ、人々の罪の責任を問うことなく、和解の言葉をわたしたちにゆだねられたのです。」(第二コリント)

イザヤ書の「苦難の僕」

「53:4 彼が担ったのはわたしたちの病/彼が負ったのはわたしたちの痛みであったのに / わたしたちは思っていた/神の手にかかり、打たれたから/彼は苦しんでいるのだ、と。 5 彼が刺し貫かれたのは/わたしたちの背きのためであり/彼が打ち砕かれたのは/わたしたちの咎のためであった。彼の受けた懲らしめによって/わたしたちに平和が与えられ / 彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた。6 わたしたちは羊の群れ/道を誤り、それぞれの方角に向かって行った。そのわたしたちの罪をすべて/主は彼に負わせられた。7 苦役を課せられて、かがみ込み/彼は口を開かなかった。屠り場に引かれる小羊のように/毛を切る者の前に物を言わない羊のように/彼は口を開かなかった。8 捕らえられ、裁きを受けて、彼は命を取られた。彼の時代の誰が思い巡らしたであろうか/わたしの民の背きのゆえに、彼が神の手にかかり/命ある者の地から断たれたことを。」(イザヤ)

- 8. 福音書における「クリスマス物語」
- ・マタイとルカ
- ・福音書の成立背景
  - ユダヤ民族・ユダヤ教の危機とエルサレム教会の消滅 → ユダヤ教の立て直し
    - → ユダヤ教イエス派の排除 → キリスト教の自立
- ・「牧会書簡」(テモテー・二、テトス):二世紀前半
  - ヘレニズム都市という生活世界に定着する。

「パウロの神学と世俗的共通感覚との間のギャップを架橋するために、「模範」という論理を導入する」(土屋博『教典になった宗教』北海道大学図書刊行会、2002 年、125)、「牧会書簡の著者は、イエス、パウロ、テモテ、テトス、教会の指導者たちを順に模範にしていくことに、教会形成の原理を見い出そうとしているのである」、「歴史をさかのぼって規範を求めていくという発想」(128)

- 9. クリスマス物語の位置、キリスト理解における受肉論の意義は後の展開。
- O・クルマン『クリスマスの起源』教文館。

「紀元後三世紀までのキリスト教徒は、一二月二五日をクリスマスとして祝っていなかった。キリスト教徒は、四世紀の初頭まで、後にキリスト教会の重要な祝日となるこの日に、集まって礼拝を献げることもなく、キリスト教の誕生を話題にするなく、他の日と何の変わりもなく静かに過ごしていた。」(7)

10. 「キリスト教神学の中心は元来、イエスの十字架と復活であった。それはパウロにおいても福音書記者マルコにおいてもそうだったし、マタイやルカにおいてもまたそうだったし、ヨハネにおいてさせもまだそうだった。それがヘレニズムの影響の下ではもはや明瞭ではなくなっているのである。そうだ、中心は今やむしろ「受肉」である。」(キュンク、91)、「キリスト論におけるパラダイム転換」(92)